

# 松本千代栄研究

## ダンス、奈良女高師附属小における創造的 自己表現の出発

鎌倉女子大学 安村清美

### 1. はじめに

戦後、舞踊教育の内容と方法に革新的な転換をもたらした、昭和22年の学校体育指導要綱の作成委員として松本は中心的役割を果たした。

昭和16年4月～18年3月、21年4月～27年3月の奈良女子高等師範学校附属小学校（以下、附属小）で子供達と共にダンス学習に命脈を掘り起こしていた、松本のこの時代を明らかにすることは、創造的芸術経験を舞踊教育の本質とみなす、この時代以降の松本およびダンス教育の萌芽期として重要な意味をもつと考えることができる。

本研究では、上記の観点から、「学習研究」誌上に発表された松本の論考を中心に、子供達の実態を視座の中心に据えた、創造的自己表現としてのダンス実践と理論の構築を明らかにすることを目的とする。

### 2. 奈良女高師附属小の教育とダンスの位置

#### ①年譜（省略、学会発表資料参照）

附属小は、大正15年、木下竹次が主事として着任以来、昭和15年に退官するまで、「合科学習」を掲げ、教育実践が行われていた。戦前、戦中の国民学校時代（武田一郎主事）をはさみ、昭和22年12月、重松鷹泰主事が着任、この間、学習誌としての実績のある「学習研究」も復刊され、昭和23年には、その後、現在まで続く附属小教育の根幹をなす「奈良プラン」（「しごと」「けいこ」「なかよし」）が、主事、教官の協議、検討を重ね、作成、実施された。

このような環境の中で、松本は、ダンス指導の実践と研究を重ね、学習雑誌上に『舞踊教育にあたって』（昭和22年）『続・身体をとらえつつ身体をのりこえていくもの』（昭和25年）『一人の生活をみつめつつ—創作ダンスの指導』（昭和26年）など、19編を残している。『子供をはなれては、何も信じるものはない』の言に代表される子ども観に基づく実践の展開は、試行錯誤とそこに立ち顕れる光明の連続でもあった。

#### ②「けいこ」「なかよし」としてのダンス

『私たちの学校のカリキュラムの特色の一つに、全学年の男女凡てにダンスを学ばせていることを挙げることができる。』（「学習研究」42号）と、重松が述べているように、奈良プランの中で、ダンスは独立した位置を占めていた。（学会発表資料、各種能力指導系統表参照）また、「なかよし」の“ダンスグループ”の指導教官として、3年生以

上の選択で組織されたグループを指導した。ここでは、『子供たち個々の個性をとらえ、二五の個性の結集に、どういう形をとって流れださせることが、最も性格をいかす方であろうか』（『学習研究』55号、二五は25人の意）と松本が言うように、より子ども一人一人を生かすべくダンスの取り組みが為されていたと考えられる。

### 3. ダンス教育の実践

東京女高師卒業後、昭和16年附属小に奉職した松本は、自主創造の空気の中で育った子どもと出会い、「音楽運動」として、教材を教えるだけのダンスに疑問をもつ。子どもを生かすダンス本来の教育的価値の探求のため、戦時下、母校研究科に入学するが、所期の目的は果たすべくもなく終戦を迎える。昭和21年から27年の6年間、附属小に戻った松本は、昭和22年の学校体育指導要綱の制定による目的と内容の転換をはさみ、実践を重ねていく。具体的には、「けいこ」としての指導の中で、週1時間、1年生から6年生までの発達（1年～3年『この時期にこそ、しっかりと真実にくいいて、なりきってできる雰囲気をも身につけさせなければ』全学年『創作的な指導と言われると、どの学年も学年相応に作品を完成していく過程が一般には予想されがちである。その完成というものを、成人のように作品の完成ととらえた時は、子供は生かされない。』（「学習研究」51号）を見通しながら、一方では、「なかよし」の指導の中で、子供の内面と身体を解き放つ方法の模索（『学習研究』『問題の子ども』『ただひとつの生命のために』など）が続いた。『現実の子供の姿から、かくあれと祈る子供の姿を描き、芸術の本質に照らして、ダンスを教育としていかにとらえるかに悩み、その安定をもとめ』（「学習研究」7号）ていた時期であるといえよう。

### 4. 創造的自己表現としてのダンスの出発

附属小での実践は、同時にダンス教育の価値—理念の構築の始まりであり、過程でもあるといえる。つまり、『ものに対して新鮮な感動をもち』『美しいものと自らの内的性格との一致がたやすい』子供、『その題材の中に踊りこんだ子供たちの生のやむにやまれぬ発現としての動き』は、『知と情の分離もなく、意と体の分離もない。そのまま多様の統一である。』（「学習研究」58号）という信念は、感動に自己を投入し、身体的創造活動として自己を表現するダンスの価値を子供の中に見出しているといえよう。

附属小の歴史、戦後という時代と人、そして何よりも子供を信頼し生かす、松本のダンス教育の原点であり、その後の核となるものをここにみる事ができる。

（本研究にあたり、松本先生御本人より、資料提供、御教示をいただきました。感謝申し上げます。）